

寄稿

フードサプライチェーンから学ぶ開発途上国への技術移転

-開発途上国の食品包装・物流産業の潮流を探る-



技術士包装物流会
会長 田中 好雄

21世紀を迎え食品包装・物流産業は大きな転換期に遭遇している。その中で感じることは、フードサプライチェーン全体を網羅した技術移転の重要性と、それをバリューチェーンに変革する知恵をどのように伝えてゆくかということである。開発途上国においても先進国、新興国同様、モノの流れを支える“食品包装・物流”の役割を如何に食品産業へ移転してゆくかがという命題が残されている。

重要と思われるキーワードを解説したい。

1. ODA(政府開発援助)とは

開発途上国への経済協力は、先進国の国々の責務であり、日本も歳出の約1%を使用してさまざまな援助を行っている。日本の2009年度(平成21年)歳出における経済協力費は総額6,295億円にのぼる。

ODAには、開発途上国に直接援助する「二国間援助」と国際機関を通じた援助「多国間援助(国際機関に対する出資や拠出)」があり、アフリカ、アジア、中東で二国間援助の過半数を占める。日本は90年代を通じて2000年まで世界第一の援助国としての地位を誇ってきたが、現在は、米、独、仏、英に続く世界第5位の順位となっている。

2. 開発途上国の食品包装・物流産業の潮流

食品包装・物流は機能と経済性を満たす分野から浸透してゆくもので、その国の経済指標を表す最適な手段である。また、安全・安心、美容・健康、環境・廃棄物対策など食品包装・物流のトレンドは世界共通の尺度で進み、道路、輸送システム、情報メディア、食品・包材加工技術などの産業基盤の構築が最重点課題である。そして食品包装・物流は21世紀の永遠のテーマとして捉えられ、人口増、飢餓、食料不足、環境・廃棄物問題への対応と大きな期待を背負っている。

3. 国際競争力の拡大と BRICS の台頭

開発途上国の中でもアジア、南米、アフリカ、中東などの食品包装・物流への注力は目を引くものがある。欧米・日本などの先進国の技術移転がこれらの国々で着実に進められており、今後の発展が楽しみである。

また、豊富な資源・人口、広大な土地を保有する BRICS（ブラジル、ロシア、インド、中国、南アなどの新興国）の台頭が期待されている。これら 5 カ国を合計すると世界の土地面積の 29%、人口の 42%を占め、世界経済に占める割合が高く GDP(国内総生産)のウエイトが 24%と米国・EU を上回っている。そして今後も比較的高い成長率を維持してゆくものと思われる。

4. むすび

現在、開発途上国の 21 パーセント、およそ 11 億人の人々がおよそ 1 日 1 ドルの生活を強いられていると言われる。それらの人々は目を輝かせて先進国の援助を待っており、関係者の努力の結果お互いが共有できる笑顔を是非とも実現したいものである。